

写真と私

時間に少し余裕ができたので、また写真を撮り始めることにした。

「また」というのは、はるか昔の学生時代に写真にはまっていた時期があったのである。もちろんフィルムのカメラだ。お金のない学生にとって一眼レフカメラは高いものであったが、アルバイトに精を出して買った。当時の国産のカメラとしては、王道のN社、よく新製品を出すC社、「お弁当箱」の愛称のM社のものなどがあつたが、先輩の影響もあり私はPENTAX-SPにした。

お金を貯めて交換レンズと三脚も買い、様々なものを撮った。山の風景や自然、都会の街の様子、歴史のある建物、鉄道や機関車、ポートレートと、モノクロでなんでも撮っていた。一時期凝っていたのが、当時話題になっていた写真家の真似をした変わったタッチの写真である。

何でもない街の様子や建物などを、意図的に手ブレをさせて、写真の粒子を荒らし、コントラストを強めにし、斜めの構図で撮った。そんな写真に、そのころの騒然とした時代の空気を投影させていた。

当時住んでいた古い学生寮には倉庫を改造した暗室があり、現像や焼き付けも自分でしていた。夜から夢中でやっていて気づいたら朝になっていたなどということもよくあつた。夢中になって写真を撮っていたころの昔話だ。そんな当時の写真が大事にとつてあるのだが、いま見ると恥ずかしい限りである。

また撮り始めることになって、デジタルの一眼レフカメラを買うことにした。

機種選びに迷うことはなかった。夢中になっていたころの記憶はどうすることもできない。PENTAX に広角から中望遠までのズームレンズを付け、これですばらくは撮ってみることにした。

何を撮るか、どう撮るかの気持ちは固まっている。プロの写真家のようにたくさん機材を持てるわけではないし、ある程度の基本的知識はあるが、専門的な知識や経験があるわけでもない。勝負は、「気持ち」と「発想」だ。

見た人が面白いと感じるようなものを撮りたいという気持ちと、そのために何を撮るか、どのように撮るかという発想である。そんな気持ちで自然の風景や街の様子、身の回りのことを見ていると、一見何でもないものの見え方や興味の持ち方が変わってくるのだ。

楽しみだ。だが、心配もある。それは、機材がもっと欲しくなりそうなことである。軽いミラーレスの一眼レフ、交換レンズ、大判のカメラ・・・とキリがない。機材を増やすことが目的になつてはいけない。カメラやレンズはとにかく高価である。

やつと買った一台のカメラで夢中に撮っていたころの「原点」にかえろう。